岐阜県文化財保護センター

研　究　紀　要

第　３　号

２０１７

岐阜県文化財保護センター

目　次

岐阜県の一括出土銭〈資料修正〉
・・小野木学　1
飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物について
・・三島　誠　12

岐阜県の一括出土銭＜資料集成＞

小野木　学

はじめに

現代社会において、貨幣は支払いや交換における主要な媒介物として使用されるとともに、祝儀や香典、神社仏閣での賽銭など、様々な場で誰もが日常的に使用している。このような身近な存在であるために、人々の貨幣への関心は高く、学校での出前授業や地域講座等では遺跡から出土した銭貨（以下、遺跡から出土した円形方孔の貨幣を「銭貨」と呼称する。）を題材とすることもあり[1]、それらが地中から大量に発見されると新聞等で大きく報道されることが多い。

岐阜県でも数十箇所で大量の銭貨が発見されている。しかし、それらの大半は掘削工事等に伴って偶然発見されたものであり、その存在が周知されているとは言い難い。そのため、小稿では、約100枚以上が一箇所（若しくは一遺構）でまとまって出土した事例（以下、「一括出土銭」と呼称する。）を集成し[2]、その出土地や枚数・銭種構成、収納容器などを検討することで、今後の県内における銭貨研究の基礎資料としたい。

1　出土地等

岐阜県における一括出土銭は、管見の限りで26地点28例を数える（図1、表1・2）。出土年は明治時代以前が6例、昭和年間が14例、平成年間が5例、不明が3例であり、特に昭和40～50年代の出土例が多い。また、出土した理由は工事中の不時発見が圧倒的に多く、発掘調査による出土例は1例のみである。

出土地は現在の行政区分の各地域（西濃、岐阜、中濃、東濃、飛騨）で認められ、安八郡神戸町を中心とする範囲の6例（3～8、以下カッコ内の番号は図1、表1・2の番号に対応する。）、

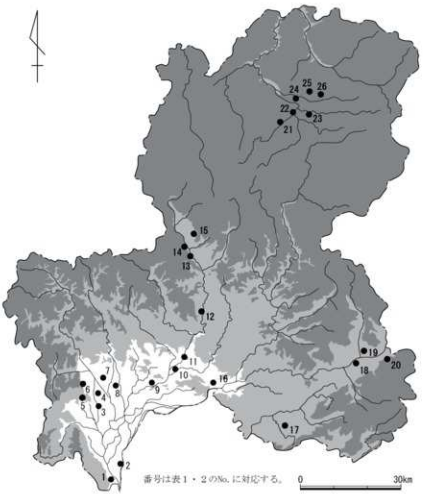


図1　岐阜県の一括出土銭位置図

郡上市大和町の３例（13 ～ 15）、中津川市の３例（18 ～ 20）、高山市の６例（21 ～ 26）は、比較的出土地がまとまっている。また、長良川に沿って出土地が散在しており（９～ 14）、主要河川を媒介とした商品流通の一端を窺うことができる。

個別の出土地をみると、城館内から出土した事例（９･23）、城館と関連する可能性がある事例（３）、寺社と関連する可能性がある事例（４・６・８・17・25）、村落と関連する可能性がある事例（２）、屋敷地の伝承が残る事例（16・18・21）など様々である。城館内の事例は地域の拠点的な場における銭貨の出土例として理解できるが、それ以外の事例については特定な場の性格や人物像と直接関連付けて説明することは困難である。出土地の分析をさらに進めるためには、詳細な出土位置の確認と出土地の考古学的研究、さらに当該地域に関する文献史料の調査や歴史地理学的研究が不可欠と考えられる。

２　枚数と銭種構成

最も多くの銭貨が出土した事例は加茂郡坂祝町黒岩（16）であり、約３m離れた２箇所から、合計約 11 万枚の銭貨が２つの甕に収納された状態で出土したとされている[3]。この事例は、他の岐阜県内の事例と比べて圧倒的に多いといえる。他に県内の１万枚以上の確実な出土例は、安八郡神戸町大字南方（４）の 10,451 枚、郡上市大和町大間見友久（15）の 10,766 枚、高山市丹生川町森部（26）の 14,896 枚の３例のみで、中津川市千旦林辻原（18）と高山市丹生川町町方尾崎城（23）が１万枚以上の出土と伝えられている。

また、出土した銭種やその枚数が判明している事例を表３・４にまとめた。このうち、銭種別枚数と合計枚数が明らかな事例で、散逸数の多い高山市丹生川町町方尾崎城（23）と、現存分との照合が困難な高山市丹生川町森部（26）を除く６例（４・９・13 ～ 15・25）を中心に検討する。

６例の合計枚数は 30,494 枚であり、鋳造された王朝ごとの構成比をみると、北宋銭が 83.12%（25,347 枚）と最も多く、次いで唐銭 7.51%（2,290 枚）、明銭 6.65%（2,028 枚）、南宋銭 2.15%（657 枚）となり、以上で全体の 99%に達する。また、銭種別の枚数をみると、皇宋通寶が 12.38%（3,775 枚）と最も多く、次いで元豊通寶 11.63%（3,546 枚）、元祐通寶 9.03%（2,755 枚）、熙寧元寶 8.96%（2,733 枚）、開元通寶 6.88%（2,099 枚）となり、鈴木公雄氏が示した全国の出土備蓄銭銭種総順位と大差がない[4]。次に、各出土銭の合計枚数に対する各銭種の比率をみると、元豊通寶が６例ともに 10%以上を占め、皇宋通寶は５例において 10%以上を占める結果となった。また、永楽通寶は郡上市大和町大間見友久（15）で 10.63%、郡上市大和町島野口（13）で 9.47%、岐阜市長良城之内遺跡（９）で 9.04%であり、３例の比率の平均値は 9.71%と高い出現率を示している。

一方、出土例の少ない銭種をみると、１枚のみの出土が確認できる銭種は五銖、咸康元寶、建炎通寶折二銭、乾道元寶、大宋元寶、２枚の出土が確認できる銭種は崇寧通寶、建炎通寶、紹興通寶、乾道元寶折二銭、端平元寶、世高通寶であり、このうち、安八郡神戸町大字南方（４）出土銭の咸康元寶と紹興通寶を図示した（図２－７・９）。また、全国的にみて一括出土銭に含まれる皇朝十二銭の存在は極めて稀とされている[5]が、不破郡垂井町平尾（５）では和同開珎、萬年通寶、隆平永寶が確認されており、珍しい事例といえる。なお、安八郡神戸町大字南方（４）出土銭には、裏面の縁に刻みを施した銭貨（図２－１・２）や、円孔銭（同図３）、文字間に四穴のある銭貨（同図４～６）

表１　岐阜県の一括出土銭一覧表(1)

No.	出土地	出土年	枚数等	銭種等	容器	出土理由・出土状況	立地・周辺の遺跡等
1	海津市南濃町松山	不明	約３貫700目	開元通賓、乾元重賓、淳熙元賓、嘉定通賓など21種類	甕	土地の開発中に出土した。	不明。
2	海津市海津町日原	昭和56年(1981)	約7,000枚	永楽通賓など、30種類以上	不明	木曽川右岸の川底から出土した。	付近には井戸跡が発見されており、村落内からの出土と考えられている。
3	大垣市笠木町、福田町	昭和45年(1970)	約600～700枚	治平元賓、聖宋元賓など	不明	杭瀬川の福田橋の架替え工事中に、水面下約４ｍで出土した。さしの状態で６本出土し、綴紐が残存していた。	福田城跡推定地が出土地に隣接している。
4	安八郡神戸町大字南方	昭和52年(1977)	10,451枚（破損銭除く）	開元通賓（621）～咸淳元賓(1266)、51種類	常滑広口壺	砂利採集時に地表下約0.7ｍから出土した。甕の周辺に灰が詰められていた。	出土地点の南東約600ｍに和泉城跡、北西約600ｍに西保北方城跡が所在する。また、出土地は寺院跡の言い伝えがあり、五輪塔が散在している。
5	不破郡垂井町平尾字石榎	明治36年(1903)	8,388枚	開元通賓（621）～永楽通賓(1408)、37種類	壺	不明。	出土地点付近の南約1200ｍに美濃国分寺跡が所在する。
6	揖斐郡池田町小寺字北谷	昭和52年(1977)	668枚以上	開元通賓、皇宋通賓、太平通賓など14種類以上	不明	圃場整備事業の際に、地表下約２ｍから出土した。	美濃安国寺から約80ｍ離れた地点から出土した。
7	揖斐郡大野町南方	明治30年頃（1897頃）	約400枚	開元通賓、皇宋通賓、洪武通賓、永楽通賓など30種類	不明	不明。	出土地点付近には領家実相院跡がある。
8	本巣市政田1024-1	昭和13～14年頃(1938～1939頃)	吼１杯分（中世以前の銭貨は現存34枚）	開元通賓、乾元重賓、永楽通賓、宣德通賓など19種類	不明	裕畑の開墾中に出土した。（現存分には寛永通賓、康熙通賓、銅１銭青銅貨などの近世から近代の銭貨が混じっている）	地元では、出土地付近を神宮、二の宮と呼称している。また、出土地の北側では発掘調査により中世後期の建物や井戸が検出されている。
9	岐阜市長良　城之内遺跡	平成４年(1992)	387枚	開元通賓（621）～宣德通賓（1433）、36種類	１号竹行李	堀（SD01）の底面から約0.3ｍ上部の洪水堆積砂層中から出土した。４緡がまとまって出土し、緡銭の周囲は黒色の粘土状のもので覆われていた。	発掘調査で見つかった館跡は「枝広館」（守護所）と推定されている。
10	関市小金田	不明	不明	開元通賓、咸平元賓、政和通賓、皇宋元賓など21種類	甕	名鉄美濃町線敷設工事の際に出土した。	不明。
11	関市池尻宗薫寺	昭和16年(1941)	約５貫	咸平元賓、祥符通賓、永楽通賓、朝鮮通賓など、19種類以上	瓶	里道の修繕中に、地表下約４尺から緡に通して一瓶で出土した。	小山の南東麓に位置する。付近には宗薫寺という寺院が存在していた。
12	郡上市美並町字下田	昭和29年(1654)	約5,000枚（重量約５貫）	永楽通賓、宣德通賓など、37種類	甕	開田中に出土した。	不明。
13	郡上市大和町鳥野口	平成８年(1996)	5,404枚（破損銭24片除く、未回収の銭貨あり）	開元通賓（621）～世高通賓（1461）、60種類	古瀬戸甕	山麓にて、墓地整備のための整地作業中に、地表下約１ｍから甕に入って出土した。甕の底部付近には直径７～８cmの円礫が敷かれていた。	長良川と平行して延びる山地の東麓に位置する。南東約300ｍでは、梵字に金箔が施された五輪塔（移ケ瀬五輪塔）が出土している。
14	郡上市大和町万場野尻	昭和43年(1968)	2,465枚（破損銭52片除く、一部散逸）	開元通賓（621）～至大通賓（1310）、48種類	古瀬戸三耳壺	開田中に地表下約0.7ｍから壺に入って、緡の状態で出土した。また、壺とともに片口鉢の底部破片と山茶碗片が出土した。	出土地から長良川を挟んだ対岸約1000ｍ南東に妙見宮跡が所在する。
15	郡上市大和町大間見友久	平成８年(1996)	10,766枚（破損銭34片除く）	開元通賓（621）～世高通賓（1461）、59種類	なし	車庫の基礎工事中に地表下約0.5ｍから出土した。一番上に一列緡の状態が確認され、その下に約0.5ｍの範囲内にかたまった状態で出土した。	大間見友久遺跡からは中世陶器が採集されている。

表２　岐阜県の一括出土銭一覧表(2)

No.	出土地	出土年	枚数等	銭種等	容器	出土理由・出土状況	立地・周辺の遺跡等
16	加茂郡板祝町黒岩361-1	昭和57年(1982)	約70,000枚	永楽通寶、宣德通寶、大観通寶など、37種類	甕	工事中に地表下約0.6mから出土した。十数枚ずつ麻紐に通してあった。	昭和59年の発見場所は、昭和57年の発見場所から約3m離れた地点とされている。また、地元では、出土地付近を陣兵衛墓敷と呼称している。
		昭和59年(1984)	約40,000枚	開元通寶、洪武通寶、永楽通寶、元豊通寶など	甕	クリ畑にて地表下約1.0mから出土した。銭貨は麻紐に通してあり、約300枚ずつ積み重ねられていた。	
17	土岐市妻木町敷島公園内	昭和39年(1964)	約1,000枚（約5.8kg）	開元通寶、慶元通寶、政和通寶、永楽通寶など	壺	公園の英霊碑の基礎工事中に出土した。	出土地には旧妻木城主の菩提寺である浄禅寺の末寺があるとされている。
18	中津川市千旦林辻原	明治30年(1897)	24貫	開元通寶、乾元重寶、永楽通寶、宣德通寶など30種類	甕	不明。	出土地は御屋敷跡、殿様藪の言い伝えのある場所である。
19	中津川市苗木三郷	昭和40年(1965)	約2,000枚（現存563枚）	開元通寶（621）～永楽通寶（1408）、36種類（563枚の計測結果）	壺	土地の開墾中に出土した。瀬戸系の壺の中から約100枚を一連として一塊の状態で出土した。	出土地から南西約500mの地点に牛首城跡が所在する。出土地には白川街道の副街道が通り、牧ケ洞には土豪の邸跡が多かったとされている。
20	中津川市露ヶ原	元文年間(1736～1740)	8貫	和同開珎、元豊通寶、元祐通寶など	甕か	不明。	武具や家財も出土したとされている。
21	高山市清見町牧ヶ洞字石原1016	昭和47年(1972)	802枚	開元通寶（621）～永楽通寶（1408）、26種類	不明	水田の区画整理の際に、地表下約0.6mにて、長径約80cmの楕円形の扁平な礫の下から出土した。	出土地から東に約1000mの地点に牛首城跡が所在する。出土地には白川街道の副街道が通り、牧ケ洞には土豪の邸跡が多かったとされている。
22	高山市下切町	不明	数100枚	洪武通寶、永楽通寶など	不明	工事中に出土した。	河岸段丘上に位置する。
23	高山市丹生川町町方　尾崎城	明治39年(1906)	1,886枚（約43.5kg、枚数は現存するもの）	五銭（581）～宣德通寶（1433）、56種類	臼	尾崎城の整地の際に出土した。発見届には11貫600目とあるが、大半は散逸している。	尾崎城二の丸付近から出土した。
24	高山市国府町宮地垣	昭和39年(1964)	約2,500枚	太平通寶、永楽通寶、大観通寶など	不明	水田の土地改良工事の際に、地表下約１mから出土した。	河岸段丘上に位置する。
25	高山市国府町宮地字目細	平成11年(1999)	505枚	開元通寶（621）～咸淳元寶（1265）、37種類	不明	林道工事中に、地表下約0.6mから出土した。畳平分程の範囲で固まって出土し、緡の状態で残存していたもある。	出土地の隣地は宮地荒城神社の社有地で、出土地は三休の滝付近である。
		平成12年(2000)	516枚	開元通寶（621）～咸淳元寶（1265）、39種類	不明	平成11年の出土地付近を再調査し、銭貨を採取した。	
26	高山市丹生川町森部字宮ヶ洞	明治18年(1885)	14,896枚（約50kg）	開元通寶（621）～永楽通寶（1408）、37種類	古瀬戸三耳壺常滑広口壺か	森部の山中から出土した。	近世において、森部には金山があったとされている。出土銭貨のうち、763枚が現存している。

注

- 出土地のうち、場所が特定できるものは地番まで記載した。
- 枚数等は原則として出典のとおり記載したが、○○文は○○枚とした。また、筆者が計数し、枚数が出典と異なったもの（No.4,25）は、筆者の計数結果を記載した。なお、重量は出典どおり記載した。
- 銭種は、総枚数と最古銭・最新銭が判明している場合は、最古銭（初鋳年）～最新銭（初鋳年）と記載し、銭種名が10種類以上明らかな場合は主な銭種のみ記載した（詳細は表３・４に記載した）。それ以外は出典のとおり記載した。
- 表１・２の出典等は、文章末に記載した。

表3　銭種別枚数一覧表(1)

No.	銭貨名	国・王朝	初鋳年	1:海津市南濃町松山	4:安八郡神戸町南方	5:不破郡垂井町平尾	7:関東郡大野町南方	8:本巣市政田	9:城之内遺跡1号竹行李	10:関市小金田	11:関市池尻宗瀧寺	13:郡上市大和町島野口
1	五銖	隋	581									
2	開元通寶	唐	621	+	870	+	+	+	33	+		309
3	和同開珎	日本	708			+						
4	乾元重寶	唐	758	+	36			+	2			21
5	萬年通寶	日本	760			+						
6	隆平永寶	日本	796			+						
7	開元通寶	唐	845		30							13
8	咸康元寶	前蜀	925		1							
9	漢通元寶	後漢	948									1
10	周通元寶	後周	955		4							2
11	唐國通寶	南唐	959	+	4							
12	開元通寶	南唐	960		1							4
13	宋通元寶	北宋	960		44	+			1			21
14	太平通寶	北宋	976	+	109		+	+	2			40
15	淳化元寶	北宋	990		68	+	+	+	6			50
16	至道元寶	北宋	995		167	+	+	+	9			78
17	咸平元寶	北宋	998	+	186	+	+	+	8	+	+	90
18	景德元寶	北宋	1004	+	253	+	+		4			119
19	祥符元寶	北宋	1009	+	257	+	+		13			132
20	祥符通寶	北宋	1009		156	+				+	+	79
21	天禧通寶	北宋	1017	+	219	+			10	+		112
22	天聖元寶	北宋	1023	+	536	+	+	+	16	+	+	294
23	明道元寶	北宋	1032	+	32	+	+		1	+		25
24	景祐元寶	北宋	1034		177	+	+		4	+		58
25	皇宋通寶	北宋	1038	+	1,425	+	+	+	29	+		621
26	至和元寶	北宋	1054		131	+	+		3			58
27	至和通寶	北宋	1054		59				1	+		8
28	嘉祐元寶	北宋	1056		148	+	+		6			59
29	嘉祐通寶	北宋	1056		268		+		2	+		138
30	治平元寶	北宋	1064	+	216	+	+	+	8	+		101
31	治平通寶	北宋	1064		28	+				+		20
32	熙寧元寶	北宋	1068	+	1,012	+	+	+	37	+		435
33	元豐通寶	北宋	1078		1,233	+	+	+	40	+	+	611
34	元祐通寶	北宋	1086		1,006	+	+		30	+		490
35	紹聖元寶	北宋	1094	+	418	+	+	+	14	+		225
36	元符通寶	北宋	1098	+	156	+	+	+	7	+		74
37	聖宋元寶	北宋	1101	+	328	+	+	+	14	+		200
38	崇寧元寶	北宋	1102		1	+						1
39	大觀通寶	北宋	1107	+	121	+	+	+	3	+	+	46
40	政和通寶	北宋	1111	+	432	+	+	+	26	+	+	185
41	政和通寶　折二銭	北宋	1111		4							
42	宣和通寶	北宋	1119		6				1			15
43	宣和通寶　折二銭	北宋	1119									2
44	建炎通寶	南宋	1127									1
45	建炎通寶　折二銭	南宋	1127									1
46	紹興元寶　折二銭	南宋	1131									2
47	紹興通寶	南宋	1131		1							
48	正隆元寶	金	1157	+	12				1			7
49	乾道元寶	南宋	1165						1			
50	乾道元寶　折二銭	南宋	1165									
51	淳熙元寶	南宋	1174	+	65	+	+		2			23
52	大定通寶	金	1178			+						2
53	紹熙元寶	南宋	1190		23							8
54	慶元通寶	南宋	1195		23	+						5
55	嘉泰通寶	南宋	1201		17	+	+					6
56	開禧通寶	南宋	1205		8		+					4
57	泰定通寶	金	1208	+	66	+	+		2		+	24
58	大宋元寶	南宋	1225									1
59	嘉定通寶	南宋	1228		24	+			1			3
60	端平元寶	南宋	1234									
61	嘉熙通寶	南宋	1237		2							1
62	淳祐元寶	南宋	1241		13		+					5
63	皇宋元寶	南宋	1253		9	+				+		3
64	景定元寶	南宋	1260		7							3
65	咸淳元寶	南宋	1266		19							2
66	至大通寶	元	1310									
67	大中通寶	明	1361									2
68	洪武通寶	明	1368			+	+	+	7		+	37
69	永楽通寶	明	1408			+	+	+	35		+	512
70	朝鮮通寶	朝鮮	1423								+	1
71	宣德通寶	明	1433					+	2			11
72	世高通寶	琉球	1461									1
73	判読不明				20				6			2
74	鳥銭											
合計				—	10,451	8,388	—	現存34	387	—	—	5,404
破損銭					5							24

注　表中の「+」は存在するが、枚数が不明なもの。

表 4　銭種別枚数一覧表(2)

No.	銭貨名	国・王朝	初鋳年	14:郡上市大和町万場野尻	15:郡上市大和町大間見友久	18:中津川市千旦林辻原	19:中津川市苗木三郷	21:高山市清見町牧ヶ洞	23:高山市丹生川町尾崎城	25:高山市国府町宮地	26:高山市丹生川町森部
1	五銖	隋	581						1		
2	開元通寶	唐	621	168	641	+	35	+	126	78	1345(38)
3	和同開珎	日本	708								
4	乾元重寶	唐	758	13	34	+	2		9	7	24(2)
5	萬年通寶	日本	760								
6	隆平永寶	日本	796								
7	開元通寶	唐	845	15	18				3	2	
8	咸雍元寶	前蜀	925								
9	漢通元寶	後漢	948	1	1						
10	周通元寶	後周	955	1	2				1		
11	唐國通寶	南唐	959		3				3	1	
12	開元通寶	南唐	960		9						
13	宋通元寶	北宋	960	6	32		2		8	6	111(1)
14	太平通寶	北宋	976	32	98	+	6		24	8	296(6)
15	淳化元寶	北宋	990	23	76	+	4	+	23	10	188(8)
16	至道元寶	北宋	995	41	145	+	13	+	48	19	1049(10)
17	咸平元寶	北宋	998	32	170	+	7		47	14	229(6)
18	景德元寶	北宋	1004	49	231	+	6	+	51	20	(17)
19	祥符元寶	北宋	1009	63	280		16	+	46	20	323(13)
20	祥符通寶	北宋	1009	44	150		8		31	15	81(6)
21	天禧通寶	北宋	1017	62	212	+	14	+	45	22	430(14)
22	天聖元寶	北宋	1023	114	485	+	16	+	103	40	619(39)
23	明道元寶	北宋	1032	7	45	+	5	+	5	2	(6)
24	景祐元寶	北宋	1034	44	125		9		25	18	529(8)
25	皇宋通寶	北宋	1038	349	1,214		57	+	136	137	269(74)
26	至和元寶	北宋	1054	32	90	+	11		23	15	323(12)
27	至和通寶	北宋	1054	12	32		1		3	4	(1)
28	嘉祐元寶	北宋	1056	36	125		9		9	13	67(7)
29	嘉祐通寶	北宋	1056	46	250	+	18		20	23	(24)
30	治平元寶	北宋	1064	40	189	+	11		20	20	215(19)
31	治平通寶	北宋	1064	7	27	+			5	2	
32	熙寧元寶	北宋	1068	241	930	+	42	+	166	78	1507(66)
33	元豐通寶	北宋	1078	328	1,212	+	69	+	214	122	1507(84)
34	元祐通寶	北宋	1086	211	917	+	57	+	154	101	1103(78)
35	紹聖元寶	北宋	1094	111	424		22	+	71	42	1143(21)
36	元符通寶	北宋	1098	32	122		7	+	26	15	(7)
37	聖宋元寶	北宋	1101	100	364		20	+	67	36	350(22)
38	崇寧通寶	北宋	1102								
39	大觀通寶	北宋	1107	24	82	+	8	+	13	20	256(4)
40	政和通寶	北宋	1111	98	330	+	20	+	62	53	269(35)
41	政和通寶 折二銭	北宋	1111	1							
42	宣和通寶	北宋	1119	8	35	+	5	+	7	5	67(2)
43	宣和通寶 折二銭	北宋	1119		4						
44	建炎通寶	南宋	1127	1							
45	建炎通寶 折二銭	南宋	1127								
46	紹興元寶 折二銭	南宋	1131		3						
47	紹興通寶	南宋	1131	1							
48	正隆元寶	金	1157		11	+		+	3		
49	乾道元寶	南宋	1165								
50	乾道元寶 折二銭	南宋	1165		2						
51	淳熙元寶	南宋	1174	15	49	+	1	+	18	8	(2)
52	大定通寶	金	1178		8			+	2		
53	紹熙元寶	南宋	1190	8	21				6	3	
54	慶元通寶	南宋	1195	4	16	+	1		7	3	67(2)
55	嘉泰通寶	南宋	1201	7	10				5	2	
56	開禧通寶	南宋	1205	3	5				4	1	
57	嘉定通寶	南宋	1208	9	26	+	2		10	3	27(1)
58	大宋元寶	南宋	1225						1		
59	紹定通寶	南宋	1228		17	+			8	2	
60	端平元寶	南宋	1234		1				1		
61	嘉熙通寶	南宋	1237	4				+	4		
62	淳祐元寶	南宋	1241		11	+	1		9	1	(1)
63	皇宋元寶	南宋	1253	1	10				5		1130(2)
64	景定元寶	南宋	1260	2	13		2		4		
65	咸淳元寶	南宋	1266	4	14	+			4	2	(2)
66	至大通寶	元	1310	2	1			+	2		
67	大中通寶	明	1361		4				2		
68	洪武通寶	明	1368		223	+	2	+	73		67(8)
69	永樂通寶	明	1408		1,144	+	53	+	112		1049(40)
70	朝鮮通寶	朝鮮	1423		11				3		
71	宣德通寶	明	1433		51	+			8		
72	世高通寶	琉球	1461		1						
73	判読不明			12	10					28	94(75)
74	鳥銭			1				+			
	合計			2,465	10,266	—	現存563	802	1,886	1,021	14,896(763)
	破損銭			52	34					16	

注　表中の「+」は存在するが、枚数が不明なもの。　26：高山市丹生川町森部の（　）は現存分を示す（丹生川村 2000を転記した）。

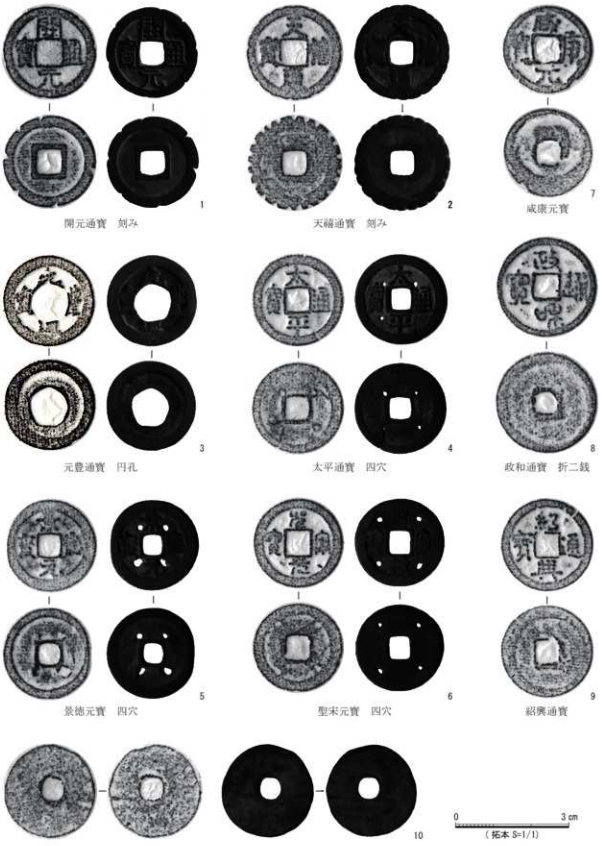


図２　安八郡神戸町大字南方の主な出土銭

などの加工銭が含まれていた[6]。しかし、四穴のある銭貨は、穴が錆び等によって生じたものか、意図的に穿孔されたものかの判断はできなかった。また、同出土銭のうち、不明銭としたものには無文銭と思われる銭貨が１点含まれていた（同図－10）。これは、重さ1.8 g、厚さ0.5～0.6 ㎜で、他の銭貨と比べて明らかに薄く、孔が四角気味で、孔郭や縁が認められないものである。また、他の銭貨よりも緑青の付着が著しく、粗悪な印象を受けた[7]。

なお、鈴木公雄氏の最新銭による時期区分[8]に照らし合わせると、安八郡神戸町大字南方（４）と高山市国府町宮地（25）が１期、郡上市大和町万場野尻（14）が２期、郡上市大和町島野口（13）と大間見友久（15）が７期となる。また、銭種に不明な点があるため取り扱いには注意を要するが、高山市丹生川町森部（26）が４期、高山市丹生川町町方尾崎城（23）が６期に該当する。

３　収納容器

収納容器の内訳は、16 例が壺や甕などの陶器、２例が竹行李などの有機物、11 例が不明若しくは確認できなかったものである。このうち、筆者が実見した資料と写真等で確認した資料を図３に掲載した（以下、文章中の番号は図３の番号に対応する）。

１は神戸町大字南方出土銭の収納容器である常滑広口壺で、底径 15.2 ㎝、最大径 35.8 ㎝、残存高 26.9 ㎝である。底部は平底で、胴部下方はわずかに湾曲して開き、肩部が大きく張り出す。胴部外面下方には底部から掻き上げたヘラ削り痕が残り、内面は肩部付近まで銭形の緑青が付着している。

２は郡上市大和町島野口出土銭の収納容器である古瀬戸甕で、底径 13.8 ㎝、残存高 11.2 ㎝である。底部は平底で、胴部はわずかに湾曲して開く。胴部外面には回転ヘラ削り痕、内面にはロクロ目が残り、胴部内外面に鉄釉が施されている。また、内面には銭形の緑青が付着している。

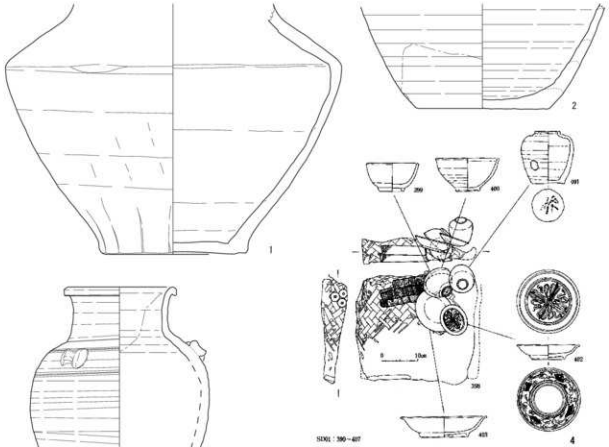
３は郡上市大和町万場野尻出土銭の収納容器である古瀬戸三耳壺で、口径 12.0 ㎝、底径 10.6 ㎝、器高 27.2 ㎝、最大幅 19.1 ㎝である。底部は平底で、後付けされた高台を有する。胴部の膨らみは弱く、肩部は撫で肩で、頸部はほぼ直立する。口縁部は外側に折り返され、耳部は細長い粘土板の両端を指で押さえて貼り付けてある。肩部外面に２条１組の沈線が上下２段に施され、高台周辺と胴部内面を除き灰釉が施されている。なお、底部内面から上へ 14 ㎝の箇所まで緑青がわずかに確認できる。

４は岐阜市城之内遺跡 SD01 出土銭の収納容器である１号竹行李で、長辺 33.7 ㎝、短辺 28.2 ㎝、残存高 7.0 ㎝である。１号竹行李内からは緡銭が４緡重なって出土し、緡銭の一方の端の上方から中国製染付皿、白磁皿、瀬戸美濃産灰釉小杯、鉄釉天目茶碗、鉄釉茶入の５点がまとまって出土した。また、竹行李内からは曲物の底板のような円盤状木製品、小型の鉄釘数点、種子なども出土した。

５・６は高山市丹生川町森部出土銭の収納容器で、５は外面に灰釉が施された古瀬戸三耳壺、６は口縁部の縁帯が下方に延びた常滑広口壺（若しくは甕）である[9]。

なお、岐阜市城之内遺跡 SD01 出土の１号竹行李は洪水砂層中からの出土で、容器内から緡銭とともに陶磁器などが出土しており、他の一括出土銭とは性格が異なる可能性を考えた方がよい。

一方、収納容器の時期と収納枚数・最新銭との関係は、表５のとおりである。図３に掲載した資料は、いずれも収納容器の時期（城之内遺跡の事例のみ埋没した時期）が、収納されていた最新銭の年代とほぼ同時期かそれよりも新しい。なお、安八郡神戸町大字南方出土銭は、収納容器である常滑広口壺の時期が 13 世紀後半で、出土枚数が１万枚以上であるにも関わらず至大通寶（初鋳年 1310 年）以



1安八郡神戸町大字南方出土常滑広口壺、2郡上市大和町島野口出土古瀬戸壺、3郡上市大和町万場野尻出土古瀬戸三耳壺、4岐阜市城之内遺跡出土1号竹行李、5高山市丹生川町森部出土古瀬戸三耳壺、6高山市丹生川町森部出土常滑広口壺か
（1～3筆者実測、4岐阜市教育委員会2000から抜粋、5・6高樋孝助氏提供、写真の縮尺は任意）

図3　一括出土銭の収納容器

表５　収納容器と容器内の銭貨

No.	出土場所	収納枚数	最新銭	初鋳年	収納容器	容器等の時期
1	安八郡神戸町大字南方(4)	10,451枚	咸淳元寶	1266年	常滑広口壺	13世紀後半
2	郡上市大和町馬野口(13)	5,404枚	世高通寶	1461年	古瀬戸甕	15世紀後半 （古瀬戸後期後半）
3	郡上市大和町万場野尻(14)	2,465枚	至大通寶	1310年	古瀬戸三耳壺	15世紀前半 （古瀬戸後Ⅲ期）
4	城之内遺跡SD01(9)	387枚	宣德通寶	1433年	竹行李	1535（天文４）年の大洪水で埋没か
5	高山市丹生川町森部(26)	14,896枚	永楽通寶か	1408年か	古瀬戸三耳壺	15世紀中葉 （古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期古）
6	高山市丹生川町森部(26)				常滑広口壺か	15世紀前半か （常滑９型式か）

注
- No.は図３の番号に対応する。
- 出土位置の（　）の番号は、表１・２のNo.に対応する。
- No.4以外は、未回収や散逸した銭貨がある。
- 収納容器の器種と時期について、古瀬戸製品のうち、2・3は藤澤良祐氏に遺物を実見していただき、5は同氏に写真を見ていただき御教示を得た。また、常滑製品(1,6)は中野晴久氏に写真を見ていただき御教示を得た。

降に鋳造された銭貨が含まれないことから、13 世紀後半頃に埋められた可能性が高い。これは、先述のとおり鈴木公雄氏の最新銭による時期区分の 1 期に該当する。1 期の一括出土銭の分布は、平成 11 年の時点で青森県から福岡県にいたる 18 府県で発見されており[10]、岐阜県においても、すでにこの頃から大量の銭を一箇所に埋める行為があったといえる。

おわりに

岐阜県内の一括出土銭は工事等による偶然の発見が多いものの、出土位置が判明している資料も少なくない。一括出土銭の研究をさらに進めるためには、その位置を埋蔵文化財包蔵地として登録し、周知することが望ましい。また、県内には未調査の一括出土銭も数多く残されている。一括出土銭が埋められた中世という時代は「商品経済の時代」[11]であり、その主要な媒介物である銭貨の研究は地域の中世史を語る上で不可欠である。一括出土銭の調査は多くの時間と労力を要するが、小稿が県内における銭貨研究の基礎的な資料となれば幸いである。今後の成果に期待したい。

なお、小稿の執筆に際し、下記の方々からご教示をいただきました。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

岩田崇、亀田剛広、高樋孝助、竹中健二、中野晴久、野村美紀、藤澤良祐、横幕大祐

注

1)　岐阜県文化財保護センター授業改善研究グループ 2016「ふるさとの歴史に興味・関心がもてる出前授業のあり方」『研究紀要』第２号　岐阜県文化財保護センター

2)　一箇所から大量に出土する銭貨の呼称は、備蓄銭、大量出土銭、一括出土銭、大量一括出土銭、一括銭、埋蔵銭、埋納銭などがある（坂詰秀一 2002「銭貨の考古学」『季刊考古学』第 78 号、雄山閣）。今回集成した資料には、埋められた行為の性格を特定できるものがほとんどなく、また、枚数は約 100 枚以上とし、一貫文（1000 枚）以下の事例も対象に含めている。そのため、銭貨の呼称には性格や量を示す用語を用いず、櫻木晋一氏が提唱した「一括出土銭」を用いた（櫻木晋一 2007「出土銭貨からみた中世貨幣流通」『貨幣の地域史－中世から近世へ』岩波書店）。

3)　岐阜日日新聞朝刊（昭和 60 年３月６日）

4)　鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

5) 注 4
6) 円孔銭と四穴の名称は、櫻木晋一 2016『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社、に従った。
7) なお、宏八郡神戸町大字南方出土銭のうち、任意に選んだ元豊通寶 10 枚の重さと厚さの平均値は、重さが 3.73 g、厚さが 1.08 mmである。
8) 注 4 なお、岐阜市長良城之内遺跡（9）は、絶枚数が少ないために時期区分を行わなかった。
9) 遺物を実見できていないため、詳細は不明である。
10) 注 4
11) 小野正敏 2000「中世の物価と埋納銭」『日本史研究最前線』新人物往来社

表１・２出典等

No. 1 岐阜県教育会 1923『濃飛両国通史 上巻』
No. 2 中日新聞朝刊（昭和 56 年 8 月 19 日）
No. 3 岐阜日日新聞夕刊（昭和 45 年 11 月 12 日）
No. 4 神戸町 1980『郷土の歴史 ごうど』、神戸町教育委員会 1983『神戸町の文化財』（銭種と枚数は、筆者と井手大介氏の計数による。）
No. 5 岐阜県教育会 1923『濃飛両国通史 上巻』
No. 6 池田町 1978『池田町史』、中日新聞朝刊（昭和 51 年 11 月 19 日）（枚数は横幕大祐氏の御教示による。）
No. 7 岐阜県教育会 1923『濃飛両国通史 上巻』
No. 8 岐阜県文化財保護センター 2016『平成 27 年度 年報』（銭種と枚数は筆者の計数による。）
No. 9 岐阜市教育委員会 2000『城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－』（第２分冊）
No. 10 岐阜県教育会 1923『濃飛両国通史 上巻』
No. 11 林魁一 1942「美濃国瀬尻村発見の古銭に就て」『考古学雑誌』第 32 巻第 10 号 日本考古学
No. 12 朝日新聞朝刊（昭和 29 年 4 月 24 日）
No. 13 永井久美男・小野木学 1997「岐阜県郡上郡大和町の大量出土銭について」『出土銭貨』第 8 号
No. 14 永井久美男・小野木学 1997「岐阜県郡上郡大和町の大量出土銭について」『出土銭貨』第 8 号
No. 15 小野木学 1997「岐阜県郡上郡大和町 大間見友久出土銭について」『出土銭貨』第 7 号
No. 16 坂祝町 2005『坂祝町史 通史編』、岐阜日日新聞朝刊（昭和 57 年 2 月 16 日）、岐阜日日新聞朝刊（昭和 60 年 3 月 6 日）
No. 17 岐阜日日新聞朝刊（昭和 39 年 5 月 23 日）
No. 18 中津川市 1968『中津川市史 通史 上巻』
No. 19 中津川市 1968『中津川市史 通史 上巻』
No. 20 中津川市 1968『中津川市史 通史 上巻』
No. 21 清見村誌編集室 1976『清見村誌 下巻』
No. 22 岩田崇氏の御教示による。
No. 23 丹生川村 1997『丹生川村史 資料編１』
No. 24 中部日本新聞夕刊（昭和 39 年 12 月 19 日）
No. 25 井之口卓義 2000「国府町宮谷出土の古銭について」『飛騨春秋』第 476 号（銭種と枚数は筆者の計数による。）
No. 26 丹生川村 2000『丹生川村史 通史編１』

参考文献

愛知県 2007『愛知県史 別冊 窯業２ 中世・近世 瀬戸系』
愛知県 2012『愛知県史 別冊 窯業３ 中世・近世 常滑系』
国立歴史民俗博物館編 1998『お金の不思議―貨幣の歴史学―』山川出版社
摂河泉地域史研究会 1993『摂河泉文化資料』第 42・43 号 摂河泉文庫
摂河泉地域史研究会 1995『摂河泉文化資料』第 44 号 摂河泉文庫
東北中世考古学会編 2001『中世出土模鋳銭』高志書院
永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院

飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物について

三島　誠

はじめに

本稿では、飛騨地域の縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物を集成し、平面形・柱配置・付属施設などの竪穴建物を構成する要素を確認することにより、時期的・地域的特徴について若干の検討を加えたい。

1　飛騨地域における研究略史

1951年、大野政雄氏らにより村山遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代前期後葉の竪穴建物１軒が確認された。その後も下呂市峰一合遺跡・高山市堂之上遺跡・白川村島中通遺跡・高山市糠塚遺跡・高山市向畑遺跡・下呂市的場遺跡・高山市中切上野遺跡などの発掘調査が実施され、飛騨地域における当該期の竪穴建物例は増加した。また、中切上野遺跡の報告書では、田中彰氏が中切上野遺跡の柱配置を推定できる好例として、ＳＢ４・７の５本柱の配置を挙げ、当該期における竪穴建物の様相が徐々に捉えられてきた。

飛騨地域における当該期の竪穴建物の基礎的な集成[1]は岩田崇氏・大石崇史氏によって行われた。この集成によって、竪穴建物検出例も飛騨地域の各地に分布すること、竪穴建物の平面形は円形を基調とし楕円形・不整円形がみられること、柱穴配置は竪穴堀方に沿って環状に配置されるものや不規則に配置されるものが多いこと、屋内施設は地床炉が多く、貯蔵穴と考えられる土坑の検出される例があることなど、当該期の竪穴建物の特徴や構成要素が整理された。竪穴建物の変遷観については、大石氏が竪穴建物の平面形について、前期前半では方形を基調とするのに対し、前期後半では円形が基調となり大きな変化がみられることを指摘した[2]。一方、長田友也氏は東海地域の竪穴建物を概観する中で、的場遺跡において方形・隅丸方形プランのものと、円形・楕円形のものが混在し、この状況は竪穴建物に関する東西の情報が入り混じった様相であると指摘した[3]。また、岩田氏は不規則かつ密集する柱配置について、竪穴建物の建て替え・拡張による影響を示唆した[4]。

これらの集成や分析から、飛騨地域の縄文時代前期前半の竪穴建物の特徴や構成要素を整理すると、以下のことが指摘されている。

①竪穴建物の平面形が前期前半では方形を基調とするのに対し、前期後半では円形が基調となり、大きな変化がみられる。的場遺跡においては方形・隅丸方形プランのものと、円形・楕円形のものが混在する。

②柱穴配置は竪穴堀方に沿って環状に配置されるものや不規則に配置されるものが多い。中切上野遺跡の柱配置は５本柱の可能性がある。

③炉は地床炉が多く、貯蔵穴と考えられる土坑の検出例がある。

④竪穴建物の建て替え・拡張により、結果として密集した柱配置のように見えている可能性がある。

これらのことを踏まえると、前期後半の竪穴建物の平面形は円形を基調とし、柱穴が環状に配置さ

れるものがあることから、同心円及び放射線を遺構に重ねて竪穴建物の平面形や柱穴・炉・貯蔵穴の配置を確認する手法が有効であると考えられる[5]。また、的場遺跡や中切上野遺跡のように遺跡毎に建物の平面形や柱配置が異なることが想定されるため、遺跡毎に竪穴建物の特徴を理解した上で飛騨地域の時期的な変遷・地域的特徴を捉えた方が有効であると考えられる。

2　集成方法と資料の概要

飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物は、12遺跡67軒である。岩田・大石両氏により基礎的な集成がされ[6]、岩田氏により資料が追加された[7]。本稿では、新たに下呂市下切遺跡の4軒と高山市八日町森ノ木遺跡の3軒を追加した（表1・2）。表中の竪穴建物の規模・壁柱穴・竪穴掘方外ピット・炉・竪穴内土坑に関しては、原則として文献の記載に基づいたが、竪穴建物の平面形・主柱穴配置については、平面図に基づき、一部変更した。また、当該期の竪穴建物は地床炉がほぼ中央に配置されており、入口施設が明確でないものが多い。このため、建物の入口は南方向を基本としたが、傾斜地の遺跡については傾斜も考慮して決定した。図2・3で掲載した平面図では下部を入口と想定して配置した。

集成した竪穴建物の特徴や構成要素は、以下の手順で確認作業を行った。はじめに竪穴建物の平面図を100分の1に揃え、同心円を竪穴建物プランの上端又は下端に重ねて平面形を確認した。次に同心円の中心はずら

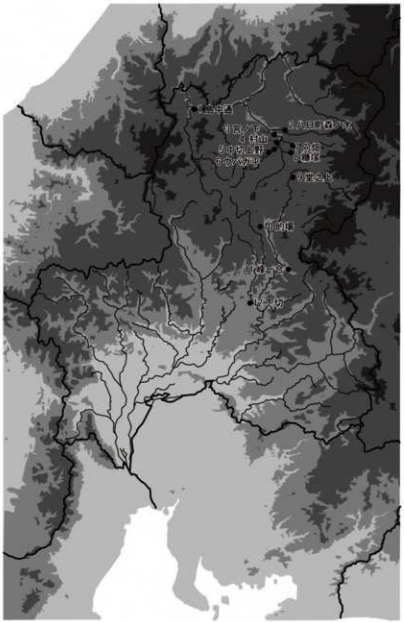


図1　飛騨地域の縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物検出遺跡分布

さずに同心円を小さくし、柱配置を確認した。最後に線を放射状に割り付け、炉・貯蔵穴と考えられる土坑の配置を確認した。

集成の結果、大石氏が指摘するように、竪穴建物の平面形は前期中葉では6例中1例が円形（その他は方形2、不整方形2、不明1）であったものが、前期後葉になると61例中38例あり、円形プラン（不整円形・楕円形を含む）の割合が多くなることが分かった。また、柱配置については不明のものが多いが、柱配置を確認できたものでは同心円上に並ぶものが36例中31例あり、多いことが分かった。付属施設については中央に地床炉を配置する例が多く、その側に貯蔵穴と考えらえる土坑が伴うものがあることが分かった。

3　飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物（図2・3）

遺構の重複が少なく、竪穴建物の平面形や柱配置が確認できる資料を中心に、遺跡毎の竪穴建物の平面形や柱穴や付属施設の配置を確認した上で、時期ごとの状況について検討する。

（1）堂之上遺跡（図2）

堂之上遺跡では羽島下層Ⅱ式併行段階[8]の竪穴建物6軒、前期後葉の竪穴建物3軒が検出されている。羽島下層Ⅱ式併行段階の竪穴建物は、平面形が方形のものが4軒、円形のものが1軒、不明1軒である。18号住居址は平面形が方形のもので、主柱穴は同心円上に4基配置され、竪穴隅部と柱穴は放射線上にのる。壁際溝は巡るが、西側中央の一部が途切れる。途切れる場所の小ピットは、入口施設に関係する柱穴の可能性がある。付属施設は地床炉と貯蔵穴と考えられる土坑がある。地床炉は建物の中央、貯蔵穴と考えられる土坑は炉の北側に位置する。17号住居址は平面形が円形のものである。主柱穴は1基で、ほぼ建物の中央、炉に接する位置に配置される。壁際溝は全周する。報告者は柱配置から考えても方形の建物と上屋の構造に差があり、機能上の差があることを推定している。

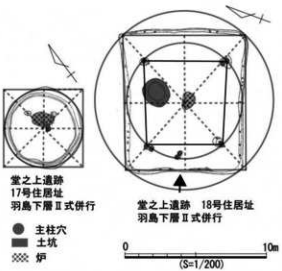


図2　飛騨地域の縄文時代前期中葉の竪穴建物

（2）村山遺跡（図3）

竪穴建物は1軒検出されている。竪穴建物の平面形は、奥壁部分がやや直線的になるため不整円形になる。主柱穴は同心円上に5基配置される。奥壁がやや直線的になる部分にあわせて奥壁部分の柱穴が中央寄りになっており、これを合わせると主柱穴は6基と考えられる。ほぼ建物の中央の炉に接する位置に主柱穴と同じような深さの柱穴が1基配置されており、堂之上遺跡17号住居址と同様に上屋の構造に関係する柱穴の可能性がある。また、竪穴外に斜めに掘り込まれた小柱穴が8基あり、垂木穴の可能性がある。南壁の上端が柱間1つ分斜めに崩れていることから、この部分（図1の村山遺跡竪穴建物の矢印）が入口であると報告者は推定している。付属施設は地床炉と貯蔵穴と考えられる土坑がある。地床炉は建物の中央、貯蔵穴と考えられる土坑は炉の西側に位置する。

（３）島中通遺跡（図３）

竪穴建物は２軒検出されている。竪穴建物の平面形はいずれも円形であり、主柱穴は同心円上に６基配置される。ＳＢ２は、建物の中央の炉に接する位置に主柱穴と同じような深さの柱穴が１基配置されており、村山遺跡と同様に上屋の構造に関係する柱穴の可能性がある。また、竪穴外に小柱穴が巡る。付属施設は地床炉と貯蔵穴と考えられる土坑がある。地床炉は建物の中央、貯蔵穴と考えられる土坑は炉の北側に位置する。

（４）中切上野遺跡（図３）

竪穴建物は 15 軒検出されている。竪穴建物は傾斜地に立地するため、建物床面の下方部分が消失する。平面形は不整形になる場合も多いが、円形を基調とする。ＳＢ10 の平面形は奥壁部分がやや直線的になるため不整円形になる。主柱穴は同心円上に４基配置される。炉の東側にある柱穴を合わせると柱配置は５本柱となる。付属施設は地床炉と貯蔵穴と考えられる土坑がある。地床炉は建物の中央、貯蔵穴と考えられる土坑は炉の南西側に位置する。ＳＢ３・７・９・13 の平面形は円形である。主柱穴は同心円上に配置され、ＳＢ９・13 は４本柱、ＳＢ３・７は５本柱と考えられる。付属施設は地床炉と貯蔵穴と考えられる土坑がある。地床炉は建物の中央、貯蔵穴と考えられる土坑は炉の南及び南西側に位置する。

（５）峰一合遺跡（図３）

竪穴建物は４軒検出されている。竪穴建物の平面形は円形を基調とするが、方形のものも１軒ある。４号住居址は平面形が方形のものである。主柱穴は同心円上に４基配置され、竪穴隅部と柱穴は放射線上にのる。炉や貯蔵穴と考えられる土坑などの付属施設はなく、竪穴外に小柱穴が巡る。３号住居址の平面形は円形であり、主柱穴は同心円上に５基もしくは６基配置される。建物の中央の炉に接する位置に主柱穴と同じような深さの柱穴が１基配置されており、村山遺跡竪穴住居跡・島中通遺跡ＳＢ２と同様に上屋の構造に関係する柱穴の可能性がある。また、竪穴外に小柱穴が巡る。付属施設は地床炉があり、建物の中央に位置する。

（６）的場遺跡（図３）

竪穴建物は 19 軒検出されている。遺構の重複が激しく、竪穴建物の平面形・主柱穴の配置を決めづらいものが多い。22 号住居址は入口施設がやや直線的になるため不整円形になる。柱配置は不明であるが壁際に比較的大きい柱穴が並ぶ。また、竪穴外に小柱穴が巡る。付属施設は地床炉があり、建物の中央に位置する。中央に地床炉がある。21 号住居址は円形を基調とするが入口施設がやや突き出る形状になる。柱配置は不明であるが、北西から東、南にかけて同心円状に巡る。また、南西から東にかけて竪穴外に小柱穴が巡る。付属施設は地床炉があり、建物の中央に位置する。

４　時期毎の状況

ここでは、時期別に概観する。

前期中葉段階の竪穴建物は堂之上遺跡の６軒のみである。１遺跡のみで竪穴建物数も少ないが、平面形が方形で４本柱配置のものと、平面形が円形で中央に１本柱配置されるものがある。

前期後葉になると、竪穴建物の確認例は増加する。図１の棟塚遺跡（８）と堂之上遺跡（９）の間に中央分水嶺（位山分水嶺）があり、北の日本海側へは庄川と神通川に合流する宮川が流れ、南の太

平洋側へは飛騨川が流れるが、図１にあるように飛騨地域では分水嶺の北側（高山盆地）に当該期の遺跡は集中する。水系ごとに見てみると、庄川水系では１遺跡、宮川水系では８遺跡、飛騨川水系では４遺跡それぞれ存在している。

このうち、やや古層の北白川下層Ⅱｂ式からⅡｃ式（古）併行段階の例として、村山遺跡と島中通遺跡の竪穴建物がある。竪穴建物の平面形は円形を基調とするが、村山遺跡のように竪穴建物の平面形は奥壁部分がやや直線的になり不整円形になるものもある。主柱穴の配置は６本柱配置であり、竪穴外には柱穴が巡るものがある。壁際溝が巡る例はなく、入口施設に関係する小柱穴も認められない。付属施設は地床炉と貯蔵穴と考えられる土坑がある。地床炉は建物の中央、貯蔵穴と考えられる土坑は炉の左側に位置する例が多い。

この時期の特徴として、前期中葉段階で平面形は方形が基調であったものが、円形に変化するといえる。また、この時期の建物には、建物のほぼ中央に主柱穴と同じような深さの柱穴が１基配置されており、この柱穴については炉に近接する位置にあるが、上屋の構造に関係する柱穴の可能性がある[9]。炉は地床炉で、想定した入口からみて炉の左側に貯蔵穴と考えられる土坑を配置する例が多いといえる。

北白川下層Ⅱｃ式併行段階の竪穴建物として、中切上野遺跡と峰一合遺跡の竪穴建物がある。竪穴建物の平面形は円形を基調とするが、前段階の村山遺跡の竪穴建物のように奥壁部分がやや直線的になり不整円形になるものもある（中切上野遺跡ＳＢ10）。主柱穴は４本から６本で、同心円上に配置される例が多い。竪穴外には柱穴が巡るものがある。壁際溝が巡る例はなく、入口施設に関係する小柱穴も認められない。付属施設は、建物の中央に地床炉、貯蔵穴と考えられる土坑が推定した入口からみて炉の左側に配置される例が多い。峰一合遺跡４号住居址のみ方形である。主柱穴は４本で、同心円上に配置される。竪穴外には柱穴列が巡る。壁際溝は巡らない。

この時期の竪穴建物は、平面形や柱穴や炉の配置等、前段階と変化が認められない。また、前段階同様、貯蔵穴と考えられる土坑が配置される例が多い。貯蔵穴と考えられる土坑が配置される例は北陸地域の同時期の竪穴建物に多く、北陸地域と共通する要素と考えられる[10]。

北白川下層Ⅲ式併行段階の竪穴建物として、的場遺跡の竪穴建物がある。竪穴建物の平面形は円形を基調とするが、入口施設がやや直線的になるものや張り出し部分があり、不整円形になるものがある。主柱穴配置は的場遺跡21号住居址のように同心円上にまわる６本以上の柱配置があるが、遺構の重複が激しい遺構が多く、傾向を捉えることができない。付属施設は、中央に地床炉がある例が多い。

５　おわりに

岐阜県飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物を整理し、その概況を述べた。竪穴建物の平面形については、大石氏が指摘するように前期中葉段階で方形基調であったものが円形基調へと変化するが、柱配置については、前期中葉段階になると、４基から６基配置される例が増えることが分かった。土器型式の変化が竪穴の平面形や柱配置に反映された可能性もあるが、前期中葉の竪穴建物の事例が少ないため、変化した要因は不明である。付属施設については、貯蔵穴と考えられる土坑が推定した入口からみて炉の左側に配置される例が多いことが分かった。

今回は、竪穴建物の平面形・柱配置・付属施設の要素を中心に特徴を捉えようとしたが、柱配置の

細かな分析や他地域との比較等までは十分に行うことができなかった。これらは、今後の資料の増加を待って検討をしたい。なお、本稿の作成にあたっては、岩田崇氏と大石崇史氏に御教示・御協力をいただいた。末筆ながら感謝申し上げたい。

注

1）大石崇史・岩田崇 2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落と墓地』、六一書房

2）大石崇 2012「飛騨の縄文時代の集落」『下呂ふるさと歴史記念館 40 周年記念シンポジウム　縄文・峰一合遺跡の時代の再検討』、下呂市教育委員会・下呂市ふるさと歴史記念館

3）長田友也 2012「東海地方にける峰一合遺跡」『下呂ふるさと歴史記念館 40 周年記念シンポジウム　縄文・峰一合遺跡の時代の再検討』、下呂市教育委員会・下呂市ふるさと歴史記念館

4）岩田崇 2014「飛騨における縄文時代前期後半に住居跡について」『東海縄文研究会第 11 回研究会（岐阜県）』、東海縄文研究会

5）竪穴建物の平面形態割付基準を用いる方法は長谷川豊氏により実践されている。長谷川氏は、信濃・伊那谷で確認した竪穴建物の平面形態割付基準の分類を用いて、飛騨地域を中心とした縄文時代中期後葉の竪穴建物分析し、竪穴建物の形状、柱穴・炉の配置に共通の基準に従って割りつけた一群があることを指摘している。本稿もこれを参考にして分析を行った。

長谷川豊 1995「飛騨における縄文時代中期後葉の竪穴住居址について」『飛騨と考古学』、飛騨考古学会

6）大石崇史・岩田崇 2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落と墓地』、六一書房

7）岩田崇 2014「飛騨における縄文時代前期後半に住居跡について」『東海縄文研究会第 11 回研究会（岐阜県）』、東海縄文研究会

8）報告書では神之木式、有尾・黒浜式とあるが、関西地域の土器型式名を用いて、時期の前後関係を確認した。なお、土器型式名の併行関係は小林達雄編 2008『総覧　縄文土器』を参考にした。

9）建物のほぼ中央に柱穴を配置する同時期の例として岐阜県揖斐川町尾元遺跡ＳＢ４がある（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003『尾元遺跡』）。

10）町田尚実 2013「富山市平岡遺跡の掘立柱建物について－縄文時代前期後半の集落の様相－」『富山考古学研究紀要』第 16 号、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所では、竪穴建物に貯蔵穴を付設する例として富山県立山町吉峰遺跡や富山市平岡遺跡を挙げている。また、町田氏は、平岡遺跡には貯蔵穴群といった集落内の空間区分は見当たらず、個々に貯蔵施設をもつという特徴が、地域色としてみられるように、集落形成においても地域性が存在すると推定している。

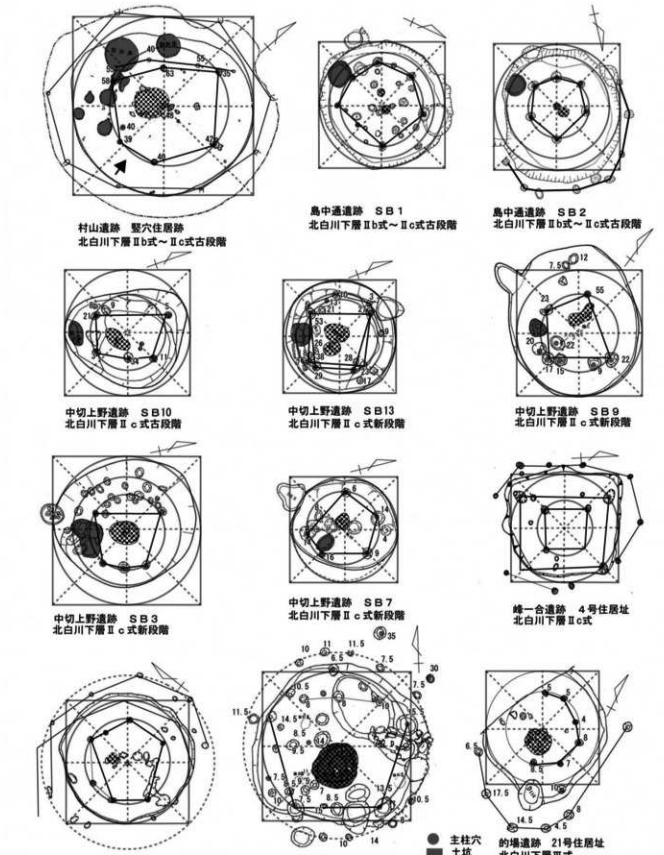


図３　飛騨地域の縄文時代前期後葉の竪穴建物

参考文献

岩田崇 2014「飛騨における縄文時代前期後半に住居跡について」『東海縄文研究会第 11 回研究会（岐阜県）』、東海縄文研究会
佐藤信之 1982「第 4 章　阿久遺跡をめぐる諸問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その 5　昭和 51・52・53 年度－』、長野県教育委員会
大石崇史・岩田崇 2003「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落と墓地』、六一書房
大石崇史 2012「飛騨の縄文時代の集落」『下呂ふるさと歴史記念館 40 周年記念シンポジウム　縄文・峰一合遺跡の時代の再検討』、下呂市教育委員会・下呂市ふるさと歴史記念館
大石崇史 2016「第 1 節　縄文時代前期ってどんな時代」「第 2 節 7　八日町森ノ木遺跡」『高山市史　先史時代から古代編（上）』、高山市教育委員会
白川村教育委員会 1983『島中通遺跡』
高山市教育委員会 1983『糠塚遺跡』
高山市教育委員会 1983『向畑遺跡』
萩原町教育委員会 1993『的場遺跡』
長田友也 2012「東海地方における峰一合遺跡」『下呂ふるさと歴史記念館 40 周年記念シンポジウム　縄文・峰一合遺跡の時代の再検討』、下呂市教育委員会・下呂市ふるさと歴史記念館
春日井恒・長谷川幸志 2003「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落と墓地』、六一書房
金三津道子 2015「第Ⅳ章 1　平岡遺跡の集落構造」『平岡遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告書第 65 集、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 2003『尾元遺跡』（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 82 集
塩屋雅夫・大野政雄『村山遺跡』飛騨中央印刷株式会社
高山市教育委員会 1999『中切上野遺跡』
久々野町教育委員会 1997『堂之上遺跡－縄文時代集落の調査記録－』
戸田哲也 2001「岐阜県における縄文時代集落の諸様相」『第 1 回研究集会基礎資料集　列島における縄文時代集落の諸様相』、縄文時代文化研究会
戸田哲也・綿田弘実・前山精明 2012「北陸・中央高地の縄文集落と生業」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅲ　生業・生活』、雄山閣
長崎元広 1980「中部地方における縄文前期の竪穴住居」『信濃』第 31 巻第 2 号、信濃史学会
国府町教育委員会 1988『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』
長谷川豊 1995「飛騨における縄文時代中期後葉の竪穴住居址について」『飛騨と考古学』、飛騨考古学会
堀沢祐一 2003「富山市内の縄文時代竪穴建物について～前期から中期にかけて～」『富山市北押出Ｃ遺跡発掘調査報告書』、富山市教育委員会
森秀典 1990「Ⅳ　調査成果」『吉峰遺跡－第 7 次発掘調査報告書』立山町文化財調査報告書第 11 集、立山町教育委員会
町田尚実 2013「富山市平岡遺跡の掘立柱建物について－縄文時代前期後半の集落の様相－」『富山考古学研究紀要』第 16 号、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
下呂町教育委員会 2003『峰一合遺跡－縄文時代の集落と下呂石による石器群』
小林達雄編 2008『総覧　縄文土器』、アム・プロモーション

表１　飛騨地域の縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物（１）

No.	遺跡番号	遺跡名	水系	遺構名	規模（m）		平面形	主柱穴		壁柱穴	竪穴外ピット	炉跡	炉数	炉位置	礫敷遺構	貯蔵穴等	住居内土坑	時期
					長軸	短軸		配置	基数									併行土器型式
1	1	島中遺	庄川	SB1	5.30	4.80	不整円形	同心円上	5 6	有	無	地床炉 掘り込み有	2	中央2	無	重複	有	北白川下層Ⅱb式 ～Ⅱc式古段階
2	1	島中遺	庄川	SB2	5.30	5.30	楕円形	同心円上 線対称	6 →中央1	無	有	地床炉 掘り込み無	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱb式 ～Ⅱc式古段階
3	1	島中遺	庄川	SB3	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	北白川下層Ⅱb式 ～Ⅱc式古段階
4	2	八日町森ノ本	宮川	竪穴住居跡 (B4グリッド)	不明	不明	楕円形か	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	前期後葉
5	2	八日町森ノ本	宮川	竪穴住居跡 (B5グリッド)	2.80	2.50	楕円形か	不明	不明	不明	不明	地床炉?	1	不明	不明	不明	不明	前期後葉
6	2	八日町森ノ本	宮川	竪穴住居跡 (C11グリッド)	3.70	不明	楕円形か	不明	不明	不明	不明	地床炉?	1	不明	不明	不明	不明	前期後葉
7	3	宮ノ下	宮川	SB1	(4.30)	3.60	方形	不明	7か	有	不明	地床炉? 不明	2	中央1 奥壁寄1	無	無	不明	前期後葉
8	4	村山	宮川	竪穴住居跡	7.40	6.65	円形	同心円上 線対称	6	有	有	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱb式 ～Ⅱc式古段階
9	5	中切上野	宮川	SB2	不明	不明	不明	不明	不明	不明	無	不明	不明	不明	不明	不明	不明	北白川下層Ⅱc式 新段階
10	5	中切上野	宮川	SB3	5.70	5.00	不整円形	同心円上 線対称	5 以上	有	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	焼跡	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
11	5	中切上野	宮川	SB4	4.70	4.40	円形	同心円上 線対称	5	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	無	北白川下層Ⅱc式 新段階
12	5	中切上野	宮川	SB5	5.30	4.24	楕円形	不明	不明	不明	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
13	5	中切上野	宮川	SB6	(5.00)	(3.50)	楕円形	不規則	4	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	奥壁寄り	無	重複	無	北白川下層Ⅱc式 新段階
14	5	中切上野	宮川	SB7	4.30	3.50	不整円形	同心円上 線対称	5(7)	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
15	5	中切上野	宮川	SB8	3.95	3.90	不整円形	不明	不明	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	奥壁寄り	無	無	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
16	5	中切上野	宮川	SB9	5.90	5.10	円形	同心円上	4 以上	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
17	5	中切上野	宮川	SB10	4.65	4.40	不整円形	同心円上 線対称	5	無	無	地床炉? 掘り込み無	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱc式 古段階
18	5	中切上野	宮川	SB11	3.40	2.90	不整円形	同心円上 線対称か	8	無	無	地床炉? 掘り込み無	1	中央	無	拡張	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
19	5	中切上野	宮川	SB12	5.30	4.10	楕円形	同心円上 線対称	9?+	有	無	地床炉? 掘り込み無	1	奥壁寄り	無	焼跡	無	北白川下層Ⅱc式 新段階
20	5	中切上野	宮川	SB13	4.70	4.30	円形	同心円上 線対称	5(6)	無	無	地床炉? 掘り込み無	2	中央2	無	無	有	北白川下層Ⅱc式 新段階
21	5	中切上野	宮川	SB14	4.30	3.60	不整円形	不明	不明	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	無	北白川下層Ⅱc式 新段階
22	5	中切上野	宮川	SB15	4.80	4.10	不整円形	同心円上か	5以上	無	無	石囲炉?掘り込み	1	奥壁寄り	無	無	有	北白川下層Ⅲ式
23	5	中切上野	宮川	SB16	3.80	3.70	不整円形	不規則	4	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	奥壁寄り	無	無	無	北白川下層Ⅱc式 新段階
24	6	ウバガキ	宮川	SB14	5.68	(2.50)	楕円形か	不明	不明	不明	不明	地床炉? 掘り込み有	1	不明	不明	不明	不明	北白川下層Ⅲ式
25	7	向畑	宮川	SB02	4.05	3.00	不整楕円形	不規則	7（5）	無	無	無	0	－	無	無	有	前期後葉
26	7	向畑	宮川	SB05	4.40	3.40	長方形	同心円上	5	有	無	地床炉? 掘り込み有	1	奥壁寄	無	無	有	前期後葉
27	7	向畑	宮川	SB07	3.20	3.20	円形	同心円上か	不明	有	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	重複	有	前期後葉
28	7	向畑	宮川	SB11	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	前期後葉
29	7	向畑	宮川	SB13	4.85	4.40	円形	不明	不明	不明	無	地床炉? 掘り込み無	1	中央	無	無	有	前期後葉
30	8	雛塚	宮川	SB01	4.00	3.50	円形	同心円上	6か	有	無	地床炉? 掘り込み有	2	中央2	無	無	有	前期後葉
31	8	雛塚	宮川	SB09	4.50	4.50	円形	同心円上	4	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	無	無	前期後葉
32	9	宮之上	飛騨川	7号住居址	6.00	不明	不整方形	不明	不明	無	無	不明	不明	不明	あり	重複	不明	羽島下層Ⅱ式
33	9	宮之上	飛騨川	13号住居址	4.70	3.30	不整長方形	不明	不明	無	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	あり 部分	無	有	羽島下層Ⅱ式
34	9	宮之上	飛騨川	15号住居址	4.35	4.10	円形	同心円上	4以上か	無	無	地床炉? 掘り込み無	1	中央	無	無	無	北白川下層Ⅱb式
35	9	宮之上	飛騨川	17号住居址	3.20	3.20	円形	中央に1本	1	無	無	地床炉? 掘り込み無	1	中央	あり 全周	無	無	羽島下層Ⅱ式
36	9	宮之上	飛騨川	18号住居址	5.65	4.80	方形	同心円上 線対称	4	有	無	地床炉? 掘り込み無	1	中央	あり 部分	無	有	羽島下層Ⅱ式
37	9	宮之上	飛騨川	28号住居址	5.22	4.60	不整円形	同心円上	7	有	無	地床炉? 掘り込み有	1	中央	無	拡張	有	北白川下層Ⅱc式
38	9	宮之上	飛騨川	31号住居址	4.70	4.00	円形	同心円上 線対称	6か+	不明	無	地床炉?不明	1	中央	無	無	不明	北白川下層Ⅱb式
39	9	宮之上	飛騨川	40号住居址	3.55	3.00	方形	不明	不明	有	無	無	0	－	無	無	無	羽島下層Ⅱ式

表２　飛騨地域の縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物（２）

No.	遺跡番号	遺跡名	水系	遺構名	規模（m）		平面形	主柱穴		壁柱穴	竪穴外ピット	炉跡	炉数	炉位置	壁際溝	拡張等	住居内土坑	時期
					長軸	短軸		配置	基数									伊行土器型式
40	9	宮之上	飛騨川	43号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	無	不明	羽島下層Ⅱ式
41	10	的場	飛騨川	5号住居址	5.72	4.67	不整形	同心円上か	3	有	無	不明	不明	不明	無	無	無	前期後葉
42	10	的場	飛騨川	6号住居址	5.90	(3.50)	不整方形	不明	不明	無	無	不明	不明	不明	無	不明	不明	前期後葉
43	10	的場	飛騨川	7号住居址	4.50	(2.00)	楕円形	同心円上か	不明	無	無	石囲炉か	1	中央	無	不明	有	前期後葉
44	10	的場	飛騨川	9号住居址	4.50	4.00	方形	同心円上か線対称か	6か	有	無	地床が掘り込み有	1	奥壁寄り	無	無	有	前期後葉
45	10	的場	飛騨川	10号住居址	4.80	不明	方形か	不明	不明	有	無	不明	不明	不明	無	無	有	前期後葉
46	10	的場	飛騨川	12号住居址	2.40	(1.20)	不明	不明	不明	無	有	不明	不明	不明	無	無	不明	前期後葉
47	10	的場	飛騨川	13号住居址	4.00	(4.00)	不整方形	不明	不明	有	無	無	0	－	無	無	無	前期後葉
48	10	的場	飛騨川	14号住居址	4.60	(3.80)	不明	不明	不明	不明	無	無	0	－	無	無	無	北白川下層Ⅱb式
49	10	的場	飛騨川	15号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	前期後葉
50	10	的場	飛騨川	16号住居址	4.95	4.35	不整円形	同心円上か線対称か	5	無	無	地床が掘り込み有	1	奥壁寄り	無	無	有	前期後葉
51	10	的場	飛騨川	18号住居址	5.00	4.60	不整円形	不明	不明	有	有	地床が掘り込み無	1	中央	無	無	有	前期後葉
52	10	的場	飛騨川	19号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	有	無	不明	－	不明	不明	無	不明	前期後葉～中期初頭
53	10	的場	飛騨川	20号住居址	不明	不明	方形か	不明	不明	有	無	無	0	－	無		不明	前期後葉
54	10	的場	飛騨川	21号住居址	5.40	(4.10)	円形か	同心円上	6以上	有	有	地床が掘り込み有か	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱ式
55	10	的場	飛騨川	22号住居址	6.80	6.20	不整方形	同心円上か線対称か	4以上	有	有	地床が掘り込み有	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱ式
56	10	的場	飛騨川	23号住居址	5.45	4.50	不整楕円形	同心円上	6か	有	有	埋甕か	1	中央	無	無	有	前期末葉
57	10	的場	飛騨川	24号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	前期後葉
58	10	的場	飛騨川	26号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		不明	前期後葉
59	10	的場	飛騨川	27号住居址	不明	不明	不明	同心円上か線対称か	5	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	無	前期末葉
60	11	峰一合	飛騨川	1号住居址	5.30	4.00	不整楕円形	不規則	7	有	有	地床が掘り込み無	1	中央	無	無	有	前期後葉
61	11	峰一合	飛騨川	2号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	地床が掘り込み無	1	中央	不明	不明	不明	北白川下層Ⅱc式
62	11	峰一合	飛騨川	3号住居址	5.40	5.30	円形	同心円上	5(6)	無	有	地床が掘り込み無	1	中央	無	無	不明	北白川下層Ⅱc式
63	11	峰一合	飛騨川	4号住居址	4.50	4.30	不整方形	同心円上線対称	4	無	有	無	0	－	無	無	無	北白川下層Ⅱc式
64	12	下切	飛騨川	S14	2.74	2.53	不整円形	同心円上	6	有	無	地床が掘り込み有	1	中央	無	不明	有	北白川下層Ⅱ式
65	12	下切	飛騨川	S15	3.31	2.85	不整方形	不規則	5か	無	無	無	0	－	無	無	不明	北白川下層Ⅱ式
66	12	下切	飛騨川	S18	4.17	3.50	楕円形	同心円上線対称	6	有	無	有	1	中央	無	無	有	北白川下層Ⅱc式
67	12	下切	飛騨川	S111	3.16	(1.35)	方形か	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	有	北白川下層Ⅱc式

短軸と長軸の長さの比から円形：正方形（1:1.2未満），楕円形・長方形（1:1.2以上），長楕円形（1:1.5以上）とし，形状があまり整っていない場合は不整円形、不整長方形などとした。他に調査区外に続く，あるいはほかの遺構に削平され形状が明確でないものについて不明とした。

岐阜県文化財保護センター

研　究　紀　要

第３号

２０１７年６月３０日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東 1-26-1